

地域防災の要となる「災害に強い薬剤師」育成プロジェクト

小畑 友紀雄 ●大阪大谷大学 薬学部臨床薬剤学講座 准教授



災害支援時、ミーティングに参加する薬剤師(↓筆者)

地域医療貢献のポイント

地域防災の要となる「災害に強い薬剤師」を継続的に育成し、平時から災害時まで活用できる薬剤情報管理ツールを開発・普及させることで、発災時における地域医療の継続性および住民の安心・安全を高める。

1. 背景と目的

本活動の出発点は、令和6年能登半島地震において、薬剤師会の災害支援チームの一員として現地避難所で活動し、災害時に薬剤師が担う役割の広さと、災害対応の知識が不足した薬剤師が現場で十分に力を発揮できていない状況に、「知らなければ支援できない」という事実を痛感したことである。

大規模災害時、薬剤師は医薬品の確保・配送、避難所での調剤、衛生管理、避難住民の服薬・健康支援など、多岐にわたる役割を担う。また、厚生労働省は、お薬手帳等で薬歴が確認できれば、医師への事後報告を条件に処方箋なしで薬を交付できる特例を定めている。しかし、現場で制度や災害薬事実務に精通した薬剤師が不足しており、被災住民への支援が行き届かない状況がある。これらの課題を踏まえ、災害時に

即応できる薬剤師の育成と、住民の服薬情報を適切に活用できる体制構築が求められている。

2. 取り組みの方法

1) 「災害に強い薬剤師」人材の育成

災害薬事の標準教育である日本災害医学会によるPhDLS(災害薬事研修)コースを開催し、災害対応力を備えた薬剤師および薬学生を育成する。大規模災害への備えとして、地域住民を支える薬剤師の継続的な人材確保と質的向上を図る。また、本研修は薬剤師・薬学生以外の他職種にも受講資格が認められており、地域での多職種連携の重要性を学ぶ機会としても機能する。

2) ICTを用いた住民の服薬情報活用

救急タグは個人情報非登録型で、緊急時に所持品から病歴等を迅速に確認できる実用的ツールである。防災士ならびにデジタルクリエイターと協働し、既存の救急タグを発展させた、「救急タグ+Medicine(救タグ+M)」を開発する。これをお薬手帳と連動させることで、災害時においても詳細な服薬情報を簡便に把握でき、被災者の健康維持と迅速な医療支援につなげる。

3. 期待される成果

PhDLSコースを継続的に開催することで、災害対応力のある薬剤師・薬学生の継続的輩出が期待される。これにより、発災時に率先して活動できる薬剤師が増加し、地域全体の防災力向上に寄与する。さらに、「救タグ+M」連携お薬手帳の定着により、被災者のみならず地域住民全体の健康維持と医療支援につながる事が期待される。